

正夢の真偽 世間の白黒をたぬだろう」と言った。そこで
 K4 *hys gryn gryn gryn wist pe hys hys gryn de hys / ses gryn so / de nas*
 Dr *winkelen* *grynke predich /* *yul ca*

正夢覚醒・ルーベンタラによって

K4 *zen dag par ritsge jake nas gryn nse me wadst hys*
 Dr *va Senast mdsare Dpnskars mnykmsahdlsas*

「バティ」家ホムナ・バティ 押さされることないや

K4 *hys nas hys hys hys gryn hys pe hys hys nas hys hys*
 Dr *vyktsas atsatskalsas era*

家のいるところから 空気に セター 腹の長さから 果った。

K4 *debi mod hys na la nas wadst la te la hys nas wadst de*
 Dr *valhsyrcas mnykmsahdlsas /* *atpysgryn /*

そこで 腹の腹はなかり、新しくもって 腹れた腹か 品に。

K4 *de nas dehi hys hys nas hys nas hys hys hys hys hys*
 Dr *ce ca-says jake hys hys hys hys hys hys hys hys hys*

「胸一何食」二〇・三（巻十）「大正」二一、397上-399下、McMahon, vol. 1, pp. 193-248 (Dharmapala); Ajapada, vol. II, pp. 429-431 (Dharmapala)

(40) 杉本清「神・Dersと呼ばれた仏陀」参照。

(41) D. vol. 15, p. 201, fol. 85a^v (P. Vol. 39, p. 171, fol. 92b^v)

(42) D. vol. 15, p. 202, fol. 90b^v (P. Vol. 39, p. 173, fol. 95a^v-95b^v)

(43) 平岡清海「p. 166, 14-15行目、及び前掲前巻p. 168, 4行目-p. 169参照。

(44) 杉本清海「p. 218参照。

(45) 杉本「『神・Ders』p. 33参照。ただしA4、をDrと同じ有意味の資料とすること、を批判する意見もある（平岡「『アッパダ』文脈に見られる仏陀の尊厳とその問題」参照）。

ハーバート・ブルーマーのシンボリック 相互作用論における社会観再考

桑原 司

一 問題の所在

いわゆる「ソコバル・ルンペン」の一員をなすハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論が、T・パースンズを中心とする構造機能主義社会学や、G・A・ランドバーグを中心とする社会学的実証主義（操作主義）を批判し、それらに代わる分析枠組や研究手法を提唱せよと示したことはよく知られている。とりわけその分析枠組に関しては、これまでの日本の研究において、それは提示する「主観主義」概念と「動的社会的」観が高く評価されてきた¹⁾。

とはいえ他方で、ブルーマーのシンボリック相互作用論に対しては、かねてより「主観主義」批判と「主観主義」批判という二つの批判が寄せられてきた（船橋、1993a, 45頁）。このうち、前者の批判に関しては、ブルーマー自身の反論（Blumer, 1977, 1980）を手取りかりとして、既に彼が別稿において詳細な検討を加えている（桑原、1996年²⁾）。本稿が問題とするのは後者の批判に他ならない。

ブルーマーのシンボリック相互作用論に対して、それが「ミクロ主義である」とする批判が寄せられてきたことは既に船橋によって指摘されている（船橋、1993年、57頁）。例えば1）J・ターナーは、ブルーマーのシンボリック相互作用論が「ミクロな相互作用過程を強調する方法論を採用してきた」（Turner, 1974, 1992, p. 115）と、その分析枠組では大規模な相互作用過程を分析することが困難であることを指摘しているし（Blumer, 1975 [1992, pp. 124-5]）、2）またメルメラーは、社会学的分析の中には社会構造についての考察が置かれるべきであるのに「ブルーマーは、そうした立場（社会構造を取り扱うという社会学の立場）から、社会学者として可能な限り、最も離れたところから位置した。彼がウェーバーにおいて見出したような、主観的立場から構造の立場へと移行する努力は、ブルーマーには全く見受けられない。… 如何なる社会現象もそれを促す個々の意味の体系として文脈において把握されるべきであると

いう「社会学一般」とは異なった研究手法を取らうとするがために、シンボリック相互作用論が有するバースペクティブは「主観的立場から集約的立場へと移行する」全ての可能性を、そしてシンボリック相互作用論が科学というステータスを得る全ての可能性を否定してしまっている（Smelser, 1988, p. 122）と、ブルーマーを批判している。すなわち、ブルーマーのシンボリック相互作用論には社会構造を分析する枠組が欠如していることを、メルメラーは論議しているわけである。3）さらにルイスによれば、ブルーマーのシンボリック相互作用論は、そうした社会構造が個人に対して与える影響を看過している傾向があるという（Lewis, 1978 [1992, p. 148]）。

以上のように、ブルーマーのシンボリック相互作用論に寄せられているミクロ主義批判には、1）マクロな社会を分析する枠組の欠如を論議するもの、2）社会構造を分析する枠組の欠如を論議するもの、3）その社会構造が個人に対して与える影響を分析する枠組の欠如を論議するもの、という三つのグリーンエーションがある。

こうした三つの批判のうち、本稿が問題とするのは第二の批判である³⁾。とはいえ、この第二の批判に対して、ブルーマーのシンボリック相互作用論のなかにも既存の「社会構造」概念を導入することによってきたというとするのが本稿の目的ではない。その理由は以下の通りである。

前記第二の批判に対して、シンボリック相互作用論のなかにも「社会構造」概念を導入することによってきたというとするのは、これまで多くのシンボリック相互作用論者によってなされてきた（船橋、1989年、第15章第1節参照）。そうした「シンボリック相互作用論者」による論考の代表格として、ストライカーの論考（Strayer, 1980）が挙げられる。ところが、ストライカーの論考に対しては、次のような批判が寄せられるに至ってしまった。すなわち、彼が「個定的で実証的」なイメージを有する「社会構造」概念を自らの理論枠組に取り入れたがために、彼の理論枠組は「シンボリック相互作用論の枠組となっているダイナミックな社会観が欠如した」となっている（その結果として彼の理論枠組は「構造論的アプローチの静的傾向」を有する「T・パースンズの思考と変わらないもの」）となってしまう（船橋、1989年、236-7頁）。つまり「せっかく導入された「社会構造」概念がシンボリック相互作用論の性格と必ずしも適合せず、むしろ、従来の社会学において指されてきたものと同大なもの」となってしまう（船橋、1989年、236頁）、とする批判がストライカーの理論枠組に

対して寄せられてしまったわけである。

T・パースンズの社会集合概念に代表される「静的・固定的社会」観を批判し、その対価に動態化しようとしたのが、シンボリック相互作用論の「動的・適応的社会的」観（船橋、1976年、1989年、247頁）。すなわち「社会」を、量化的・定量的なものである流動的な過程（船橋、1993年、55頁）ないしは「動的」生成発展的なもの（船橋、1976年、32、283頁）と捉える社会観に他ならないにもかかわらず、そうしたシンボリック相互作用論の分析枠組に、安易に「既存の」「社会構造」概念の導入を試みれば、まさにストライカーの二の舞を演じることになりかねない。

彼々の目的は、以下のことをブルーマーのシンボリック相互作用論にそくして証明することにある。

すなわち、シンボリック相互作用論という視点を採用するならば、社会は「必然的に」「動的・過程的なもの」として捉えられなければならない。

こうしたことが明らかにされれば、「既存の」「社会構造」概念がそもそもシンボリック相互作用論の社会観が有する性格とは相容れないものである（船橋、1989年、236、237頁）ということが明らかになる。その結果としてさらに、シンボリック相互作用論に対してかれてより寄せられてきた前記第二の批判が、そもそもシンボリック相互作用論に対する批判として妥当なものではないということも自明から明らかになる。

ところで、上述の論議を遂行するに際して導出しなければならない重要な論点がある。それは、ブルーマーのシンボリック相互作用論において、社会が動的・過程的なものとして捉えられなければならない必然性を、ブルーマーのシンボリック相互作用論の論議の柱石となっている⁴⁾「自己相互作用（self interaction）」概念とこの概念を結びつけるものとして明らかにしなければならないという論点である。では何故にそうした論点を導出しなければならないのか。何故なら、そうした論点を導出すれば、結果として社会、その社会の作用原理を、個個人の行為から切り取り捉えられなければならない社会その自体のメカニズムに帰着するものとして捉えられなくなってしまうからである。ところがそうした立場はまさにブルーマーが批判したものであった。ブルーマーは社会というものを「それ自体の原理にしたがって作用」する「一種の自己作用の実体」ないしは「ひとつのシステム」としての性質を有するもの」と認識する立場を「重大な誤りである」と断言し批判している（Blumer, 1969, p. 19）。ブルーマーによれば「ある社会の」ネットワークや制度は、その

社会やその不可分の要素である人々の要求と一致して、自動的に協賛するわけでは、ない。その協賛の過程は、誰かが提案した人から何人かのところを行くものである。そして彼等の何を行くかは、彼等が自分の好みを決定し、自己相互作用を通して集団に定着するに決まっている(Blinner, 1969, p.19)。

また伊藤も言うように、フリーマーが指摘してやまない社会学における最大の問題とは「こうした現象の自己相互作用の過程」を単純化して、社会的相互作用をよりマクロな社会の構造、行動を導くものとする試みだ(伊藤, 1993年a, 120頁)なものである(Blinner, 1969, pp.19-20, 74-5, 88-9)。こうしたフリーマーの立場を待って促すものがある。社会的組織、規範的なものとして把握されなければならない社会、自己相互作用現象などの確固たる結びつきをもった社会になじなければならぬ、自己作用。

二 ジョイント・アクションとしての社会

そもそもブルーマーのシノボリク相互作用論において社会なるものは如何なるものとして把握されていたのか。そこから議論を始めなければならないだろう、このことを明らかにする上で、ブルーマーの以下の説明が参考となる。

「[ジェントイル・アクション・] (gent. action) という用語が示すのは「社会的行為」(social act) という用語の代わりになる。この用語が示しているのは、個人が他の人物を通じてせざるにせざるに成る或る方式、行為のいっそうきざしなき無条件の形勢のことである。ジェントイル・アクションにおいては、二人の個人間の単純な共同から、大規模な組織や組織による行為の複雑な配列化までが含まれるのである」。

……事実こういった[ジェントイル・アクション・]の要所の全体が、その社会の振舞の多様性と可変的な結びつきと複雑なネットワークとによって、一つの社会を形づけているのである。

——ドードはこの社会的行為と社会の基本的単位であったのである。したがってそれを分析すれば、社会の全体的な特性が明らかになる。(Blumer, 1969, p.70)

以上のブローカーによる説明において示された論点を補足しつつ整理すれば以下のように捉えられよう。

- 1) ジュイント・アタクションとは、行為のいっそう大きな集合的形態のことを意味する。

の行動ないしは行為を適合させ合うことから成り立つ。したがって、その形成に参加している個々人は、自らの行為を他者達の行為に適合させなければならないことになる⁷⁾。

- 3) ジョイント・アクションの悪い例には、個人の力たらず、大規模な組織や機関もある。
- 4) したがって、ジョイント・アクションには、温かみの単純な共済から、大規模な組織や機関による行為の両端に配列されていくがみられる。
- 5) このようなジョイント・アクションが、他のジョイント・アクションと結びつくことによって、一つの組織が形づくられている（この点については[Rumer, 1959, pp.16-20]を参照されたい）。
- 6) したがって、ジョイント・アクションは、社会の基本的単位であり、それを分析すれば、社会の具体的な特性が明らかにされる。
- 7) したがって社会の性質の知照は、それを構成するジョイント・アクションの性質の知照によって決定されることになる。

では、ブルーマーにおいては、そのようなジョイント・アクションの成立は如何にして可能であると捉えられていたのか、以下そのことについて考察して行きたい。

ブルームーに於けるシムント・アーションの形成は、「シンボリックな相互作用」(symbolic interaction) において行われる。ここでシンボリックな相互作用とは、ブルームーにおいては、ある「身振」(gesture)の显示と、その身振の「意味」(meaning)に対するものとの相互とによって決定されること、さらには、それがそれと個人とをとりわけられる人々の双方に対して意味を持ち、両者に対して身振が同じ意味を持つこと、両者は相互に理解合している、とブルームーにおいては考えられている (Bumer, 1969, p.9)。ブルームーに於ける、こうした身振りとは、それを発する者とそれが受けられる者の双方に対して次のような三つの意味を有する (Bumer, 1969, p.9)、すなわち、(a)身振りの意味は、それが向けられる個人が何をするべきかを促す。第二に、(b)その身振りを発している個人の何をするにしようとしているのかを示す。第三に、(c)この両者の行為の個人化することによって生じるシムント・アーションの形質を表す (Bumer, 1969, p.9)。それをブルームーに次のように例証している。

「例えばある陸軍が、被害者に向かって両手をあげろと命令するとき、その命

令〔＝身振り〕は次の三つのことを表している。すなわち、(a)被害者がこれから行くべきこと〔つまり、両手を挙げる、という行為〕、(b)強盗がこれから行おうと考えていること、すなわち、被害者から現金を奪い取ること、(c)同者の間で形成されようとしているジュ・イント・アクトシヨンの形態、この場合は強盗である。(Blumer, 1969, p.9)

ブルーマーによれば、身振りが有するこうした三つの意味を、身振りを発している者自身が向うに対してその両方が「適切に把握し」、その意味に適っているように行なうことを、そこに「適切な」*マタツク*が成立するとする（Blumer, 1989, p.9）。またここで身振りの意味を「適切に把握」するとは、身振りを発している者と、それに向けている者の両方が、その身振りに対して「同じ意味を付与すること」を意味している（Blumer, 1957 [1992, p.52]; Blumer, p.153, 179）。さらにこうした意味付与が、双方の「自己相互作用」(self-interaction)の過程を通じてなされているものと捉えられていることは言うまでもない（Blumer, 1989, p.14, 79, 80）。

では、身振りを発している者と身振りが向けられている者の双方が身振りの意味を「適切に把握」することは如何にして可能なのであろうか。この点について、身振りを発している者を個人A、身振りが向けられている者を個人Bとし、以下、議論していくことにしよう。

個人が他人の「借」を他人に「貸」て発している事情を想定してよ。

借入の立場に立つて考察するならば、借入者が、借入から発生している負債の返済の要請を適切に受け止めることと思えば、借入者は、返済を拒否してはならない。ところが貸し手として貸付している貸主は同じ意味を、借入者がその負債に付合ふことと思えば、借入は、借入が貸主の利益をその負債に付合ふに付合ふこと(考案)(taking into account)しなければならない¹⁾。ところで、何かに支払を伴うということ、その何れがある一定の「ベース・ペクト」(perspective)にたつたものである(percieve)ことと周知である²⁾。

借入が返済をしなければならないものは、借入者がその返済を知覚する際には用いている借入のベース・ペクトであることとなる。ところが、借入者は借入のベース・ペクトを尊重し、そのベース・ペクトを用いて、借入者が負している負債を知覚しなければならないことになる。他方、借入に即して考察するならば、借入は、借入に即して負債を発生する際に、借入が借入者の負債に即して適用する借入のベース・ペクトをベース・ペクト、すなわ

ち、個人Bが考慮する個人Aのパーソナリティを考慮した上で、個人Bに対して劣位性を発しなければならないことになる。その個人Bの立場に立って考察するならば、個人Bも、個人Aが考慮する個人Bのパーソナリティを考慮した上で個人Aに対して劣位性を行わなければならないことになる。すなわち、個人Aと個人Bの双方は、必然的に「誰に自分が相手を考慮するべきか」というのではなく、互に自分に対する考慮もを行っている相手として、その相手を考慮する（Rumner 1969, p.109）。しなければならぬわけである。すなわち「考慮の考慮」と呼ばれる現象が個人Aと個人Bの双方にはあわなければならないわけである。

に対して過剰に「個人Aと個人Bの双方が、そこで用いられている表現に
 対して、両方完全な合意を持っている」とか、そうした表現のこのセムール（註
 訳）に「有意味なシンボル」(significant symbol)と書き添えて、この「有意味な
 シンボル」のことを「普遍的なもの」(universal)とないは「共通の定義」(com-
 mon definition [meaning])とも思われる(Blumer, 1967 [1992, p.52]).
 ブルーマーによれば、この「共通の定義」が、ジェント・アレンの「親性
 ・安定性・弄感性」という一定の形相の固定的な反復を保障するとい
 う(Blumer, 1969, p.71).すなわち「共通の定義」によって、「ジェント・アレン
 」の形相への対峙は、自身が行なう他者の行なう適合させるもの、は
 まったくこの事象が与えられる、この共通の定義によってによって、確かな
 認識域にたがったジェント・アレンの、親性・安定性・弄感性が最も
 よく観察されるのである」と(Blumer, 1969, p.71).

ソノメカトロ相互作用論においては、社会的なものは（したがって、ジョイント・アクションは）動的・適応的なものとして扱われなければならない。これがシンボリック相互作用論の重要なテーゼの一つであった。ところが、上記のような、ジョイント・アクションの非制約性、非決定性、非理性を説くブルマーの立場は、そうしたテーゼに反しはしないだろうか。というのも、ブルマーの立場においては、ジョイント・アクションが（したがって社会が）動的なものとしてではなく、固定的なものとして把握されているかのように思われるのである。

無論、他方でブルーアーは、ジョイント・アクションには確かにそうした「復讐性・安定性・再記性」が認められつつも、そうした「復讐性・安定性・再記性」がジョイント・アクションの本来的な性質だと考えてはならない、ということを示す方法論として、そのことについてブルーアーは「ジョイント・アクションの歴史は、多くの不確実の可能性にも開かれていてと考えなくてはならない」

(Blumer, 1969, p.71) と述べている。すなわち「不確定性や偶然性や予知の出来
変化が、ジョイント・アクションという過程の重要な部分」(Blumer, 1969, p.71)として認識されなければならないが、ブルマーは主張しているのである、
つまり、ジョイント・アクションを制度的なものとしてではなく動的なものとして
理解しなければならない、ということではブルマーは主張しているのである。
そのことは、ブルマーが「[Oとつづきの人間]の社会を構成する複雑なジョイント・
アクションが、固定され確定された経路に従うように設定されている」と考えるの
は、全く誤謬のなことである」(Blumer, 1969, p.72)と述べていることから
も理解されよう。

本画における役割の目的が、ブルーベリーのシンボリック作用と見做すに依り、社会的な価値・適格性のものとして把握されなければならない所以を、自己固有作用概念との帰納的な結びつきをもとに明らかにすることであることが第一節で述べたとおりである。この目的を達成するためには、ジャンティ・アッシュが動的なものとして把握されなければならない所以、すなわち「ジャンティ・アッシュ」の価値は、多くの不確定な可能性とも関連していると考えなくてはならない¹⁾而在于はく「不確定性や偶然性や手易な変化等が、ジャンティ・アッシュ」として価値の重要な部分として認識されなければならない²⁾を、自己固有作用概念との帰納的な結びつきをもとに明らかにすることに性ならない。次節では、こうした性質に基づいて上述の目的を達成することにしよう。

三 動的・過程的なものとしての社会

可放はジョイント・アクションの原理は、多くの不確定の可能性に開かれていてとてふべきではない。可放は不確定性や偶然性を予知可能な量か否かがジョイント・アクションといふ過剰な要素な部分として認識されるべきではないから、こうしたことを自己相互作用概念との確固たる結びつきのもとに明らかにすることは、自己相互作用概念との確固たる結びつきをともなう。ジョイント・アクションの属性性（安らぎ・不協和性が維持され続けるといふこと）を可能とであるということを実際にすることを意味する。換言すれば、共通の定義が維持され続けられる可能性が示し得ないことを、自己相互作用概念との確固たる結びつきのもとに明確することと見做らる。

文献において明らかにされたように、ブルーマーのソソポリータ相互作用論に

54

ないしは「トータバック」(tail back) する (=「例外的実例」(exceptional instance) を提示する) ことが出来るという特性を持っているものとして捉えられていた。さらに、そうしたトータバックないしは例外的実例の発生を基盤として、個人は自らの既存の解釈や定義の妥当性の如何を知ることができ、そうした解釈や定義も修正することになった、と暗示されていた¹⁷⁾。

したがって、ブルマーのシンボリック相対立理論においては、ある個人にとっての「他者」といって存在をなす。いつでもその個人によるその「他者」に対する解釈や定義に対してトポロジック（＝図形的実例を提示する）ことが出来るという性質を持っているものと見て捉えられようことになる。さらに、そうしたトポロジックは図形的実例の発生を契機として、その個人は自らの既存の解釈や定義の妥当性の如何を知ることができ、既存の解釈や定義を修正することになるものとブルマーにおいては捉えられようことになる。

相互作用論から次のように結論づけられる。すなわち、プルーナー・シンポジウム相互作用論においては、「共通の定義」なるものが永く共通され続けるといふことは本来的に不可能なこととして捉えられなければならない。何故なら、客観の定義が維持され続けると同時に、客観を呈示している人間は、その客観が与けられるべき客観ではない、あるいは一定の客観の客観を呈示している他者として解釈・認識・定量化するし、定義・定量化もできないと受け止めるようになるが、解釈・認識・定量化するその「他者」には、「いつも」その解釈・認識・定量化に対して「それ」がある（一例の客観を以て示す）ことと出来たとはいへない。したがって、そのような解釈・認識が修正されなければならない可能性が、「いつも」奔っていることとなるからである。したがって、プルーナーの意図からすれば、客観を呈示している人間が、その客観の与けられている他者であり、あるいは一定の客観の客観を呈示している他者として解釈・認識し、あるいはそうした解釈・認識が定量化もできるということは不可能なことと捉えられなければならない。したがって、プルーナーのシンポジウム相互作用論の立場からすれば、「共通の定義」が維持され続けるといふこと、すなわち「ある客観を呈示している人間が、その客観が与けられている他者と同時に自らその客観を呈示している」状態、ないし「相互作用を通じてある客観が、そこに与えられている他者に対して、きわめて自然に自発的に進行の過程を通じて、両当事者から付与されている」といふ客観の維持が永く続くとすることは不可能なことと捉えられなければならないのである。故に、プルーナーのシンポジウム相互作用論は

であり「共済の定款」とは「有意味なシンボル」とを有しているとしたら、¹³¹ 共通の定款を保持している状態にある人間は、有意義なシンボルが保持されている状態であると言える。では有意義なシンボルが維持されている状態とは如何なる状態か。先に明らかにしているように、相互作用を行っている個人が、そこで用いられている規範に対して、各自が自己相互作用の過程を通じて、同じ意識を作り出している状態である。このように状態をグループにある状態を提示している人間が、その状態の方向性について他者とよりさらに自らの物語を見ている」状態であると表現している (Blumer, 1993, p.179)。この状態が維持され続けていることは、身体性で表現している人間は、その身体が作り出している能力をある一定の尺度でその身体性で意識している状態であり、意識が、常識にかつとした状態・意識が常識が常識であるという人間がなければならぬ¹³²。さらに正確に言える。ここでは常識を呈示している人間が想定した正確な「ある一定の能力が、実際にその能力が採用している」ある一定の能力¹³³と正確に一致し、能力がなければならぬことになる、ところがまさにこれと矛盾する特性が、この「他者」にはあるのである。それにより以下に明らかにしよう。

ブルーマーによれば、ソソボリツク相互作用論においては、ある個人を取り巻く「世界」(world)とは、「対象」(object)から「のみ」構成されるものであると捉えられている (Blumer, 1969, pp.10-1)。故に、ある個人にとっての「他者」という存在もまた、その個人にとっての「対象」としての位置づけを有していることになる (Blumer, pp.10)。

ところで「対象」とは、ブルーマーにおいては、個人がある一定の「パーソナリティ」(perspective)にしたがって知覚した(すなわち自己相互作用の過程を通じてある一定の意味を付与した)「現実の世界」(world of reality)である。一定の個人を指すから¹¹⁾、「対象」とは、一方で個人によって知覚されたものであると同時に、他方で「現実の世界」のある一定の部分であるということになる。したがって、ブルーマーにおいては、ある個人にある一定の「性質」という存在もまた、一方でその個人によって知覚されたものであると同時に、他方で「現実の世界」のある一定の部分でもあるということになる。

では、ブルーマーにおいては、その「現実の世界」とは如何なる特性を有するものとして捉えられているのか。

先に我々が明らかにしたところによれば(藤原, 1996b), 「現実の世界」は、個人によるその世界に対する解釈や定義に対して「いつでも」「どこでも」(anytime, anyplace)

いては、ジョイント・アクションなるものは本来的に動的なものとして把握されなければならない、そうしたジョイント・アクションから構成される「社会」なるものもまた動的なものとして把握されなければならないことになるのである。

以上、本稿における議論を踏まえるならば次のように結論づけることが出来る。
すなわち、シンボリック相互作用論という視点を採用するならば、社会は「必然性」「動的」「過程的なもの」として捉えられなければならない。したがって、「既存の」「社会意識」概念はシンボリック相互作用論の社会観が有する前提とはそもそも相容れないものである。故に、シンボリック相互作用論に対してかねてより寄せられてきた前記第二のようない批判は、そもそもシンボリック相互作用論に対する批判として妥当なものでない、と言われざるを得ない。¹²⁾

<詳>

- [illegible]

研究手法とは、ブルーマーが分析神韻において描いている「行為者が自覚的にこなしていること」を先決条件としたものではない。そのため、ブルーマーの研究手法の類型を探るといっても、まずもってこの分析神韻を検討することが必要となるからである（熊鷹，1996年b，90頁）。こうした研究手法と分析神韻との関係について以下、少く詳しく述べておくことにしよう。

上記の様なブルーマーの立場は、プラグマティズムの思想と深く関連している。シンボリック相互作用論が「まず何よりもプラグマティズムの影響下にアメリカで成立」（マートン，1970年，406頁）したことは今や周知のことであるが、もとよりブルーマーのシンボリック相互作用論の場も例外ではない（松浦，1978年，27頁）。ハマーズレイによれば、そのプラグマティズムの思想においては、科学や哲学とは、人間の現時的思考の産物として認識されていた（Hammerley, 1989, p.40）。そのことについて、ハマーズレイは以下のように述べている。

「哲学及び科学は、日常主題における問題から出現し、その問題の解決に向けられる。多くのプラグマティスト達は、科学を、人間の知識がそうあるべき態勢として見て、同時に、人間の知識を喪失するものとして、その結果として、人間性そのものの喪失及び人間の環境に対する道徳的破壊をもたらすものとして見ていた」（Hammerley, 1989, p.46）

さらにこうした思想が、ブルーマーのシンボリック相互作用論の分析神韻と研究手法の形成過程に多大な影響を及ぼしたとハマーズレイは見ている。鑑于此れば「ソコフ派社会学、さらにハーパー・ブルーマーの方法的な意見の相違に對して、最も重要な影響を与えた哲学思想はプラグマティズムであった。ブルーマーやその間のソコフ派が、人間の社会生活の特性に関する自らの知識の多くを同時に方法論的な見解の壁つらを引き出したのは、まさにこのプラグマティズムからであった」（Hammerley, 1989, p.44）。

こうした見解を事実ブルーマーも認めている。ブルーマーにとって科学とは、人間の内在的知性の理想的形態を意味する。また科学的手法とは、日常的手法を域に昇昇ないしは先決条件としたものではない。いまだ同様に、ブルーマーのシンボリック相互作用論においてもこうした考え方は異ならない。この様にブルーマーは述べている（Blumer, 1989, p.416）。さらにブルーマーが提示する（社会）科学的手法としての「自然的調査」（naturalistic investigation）即ち（ブルーマーのシンボリック相互作用論の研究手法）（熊鷹1）も、日常的手法を域に先決条件としたものとして、ブルーマーにおいては位置づけられているのである（Blumer, 1989, p.415）。

こうした意味で、ブルーマーのシンボリック相互作用論においては「科学者と経験的世界との関係が如何なるものであるのかについての問題が、行為者と世界との関係に関する議論に置きあわれている」のである（熊鷹，1996年b，94頁）。

4）第一の批判に関しては、メイジンボウの著作（Meisgen and Morris, 1980, xiv-

xvii）及び宝月の見解（宝月，1988年，150～151頁，1989年，2～4頁）が所収である（熊鷹2）。また、第三の批判に関しては、熊鷹（熊鷹，1996年b，第1頁及び第2頁）も参照されたい。

5）従来の議論においては、ブルーマーのシンボリック相互作用論において、社会が動的・過程的なものとして把握されているということが、その重要な特徴として指摘された。そうした特徴は、いざわ自覚されている傾向があり、必ずしもブルーマーにおいて社会が動的・過程的なものとして把握されなければならない必然性が明らかにならなかったと懸念される（熊鷹2）。本稿では、ブルーマーのシンボリック相互作用論においては社会は動的・過程的なものとして把握されなければならないのか、その論理的必然性を明らかにすることにした。

6）『オラウス・ワルク，1983年，299頁。参照。さらに、この自己相互作用概念があるからこそ、ブルーマーのシンボリック相互作用論は、独自の社会学的・社会心理学的パースペクティブとしてそのアイデンティティを確立しているといっても過言ではないのである。ブルーマーによれば「シンボリック相互作用論というパースペクティブは」「人間の行為を研究する上で、自己相互作用の論議を何よりも重要なものとする一極の分析神韻なのである」（Blumer, 1993, p.181）。

この自己相互作用概念の内実については、簡単にではあるが別項において描かれていた（熊鷹，1996年b，86～7頁）。今や、ブルーマーのこの自己相互作用概念は、社会学における重要な概念のひとつとしての位置づけを有している。と云っても過言ではない（宝月，1995年ab，参照頁参照，1993年参照）。

7）こうした意味で、ブルーマーにおいては、行為者の「行為」とは、行為者の他意識に対する道徳的行動のことを意味していたと云える。詳しくは熊鷹（熊鷹，1996年b，85，96頁）を参照されたい。

8）ここで何かを「考慮する」（take into account）とは、ブルーマーにおいては、自己相互作用の過程を通じて、その何かにある一定の意味を付与することと同義として扱われているものと想像される（Blumer, 1969, p.64, 80）。このことはブルーマーが「考慮する」ということを「思考を考慮する」ということは、その思考をばきりうと置出し、何らかの形に論議し再検討し、その思考の行儀を見直し、また何を考えを放棄し、どうにかをい出し出すとすることを意味する」（Blumer, 1969, p.109）と表現しているところから想像されよう。

9）[Blumer, 1969, p.2, 5, 10-11, 14, 79, 80]及び熊鷹（熊鷹，1996年b，90頁）参照。

10）こうした理解や定義というよりも、熊・Aの自己相互作用の過程を通じてなされているものであるということはまずである（Blumer, 1969, p.83）。

11）熊鷹（熊鷹，1996年b，90頁）参照。

12）詳しくは、熊鷹（熊鷹，1996年b，第3頁）を参照されたい。

13）本稿では「動的・過程的なものとしての社会」というテーゼを掲げるブルーマーのシンボリック相互作用論の分析神韻とそれ自体の社会理論としての妥当性については検討することができなかった。そうした点について資料を行うためには、ブルーマーのシンボリック相互作用論が生まれた土壌であるアメリカ社会とブルーマーの分析神韻との関係に関する知識社会学的研究が必要となる（熊鷹，1989年，注，1991年，7～8頁下段，1987年，349～350頁）。さらに、ブルーマーのシンボリック相互作用論が「まず自らのルーツとしてソコフ派を起源づけ、その伝統の継承と現代的変容を成す」（伊藤，1999年b，22頁）したものである以上、ソコフ派社会学の知識社会学的研究も必要の議論となる。こうした事例については、本稿では篇幅の関係で述べることができなかった。但し機会に逢ってみたいと考えている。